

第2回 ESD・構成主義研究会概要報告

◇開催日時 平成29年5月2日(火)18時～21時

◇会場 中澤研究室

◇参加者 河野(附属小)、新宮(平城小)、中澤

◇内容

前回の復讐

第3章「構成主義の教育理論」

○構成主義の基本前提

①知識はその社会を構成している人々の相互作用によって構築される。

②私たちの理解の仕方は、おかれている歴史や文化に強く依存した形をとっている。

○ピアジェの均衡化モデル

- ・学習者(主体)が客体と相互作用することにより(体験を通して)理解していく。その理解したものが既存の知識と矛盾していることがわかると、統合して考える(平衡化)という一連のプロセスを通して学んでいく。

○ヴィゴツキーの最近接領域

- ・子どもの学びにおける模倣は、「発達の最近接領域」において現れる行動である。発達の可能性のある領域において模倣を行う。:知識構成の活動(佐藤)
- ・互いに仲間同士が学び合う協同学習
- ・教室の人間関係や社会的文脈のあり方により学びの発達状況が変わる
- ・協同で意味を作り上げていくプロセスを経ることにより、より高度な学習が行えるようになる
- ・「仲間相互の教え合い」により、問題を解決していくレベルが上がっていくことが学びである。

○デューイの問題解決的思考

- ・人は環境に主体的に働きかけ、内省を行いながら「探求」していく存在
- ・「道具的思考」を活用し、洞察と反省と熟考という探究を展開して環境を意味的に構成しながら、自らの経験も再構成する。
- ・学びとは、環境の中にある道具や人に働きかけて問題を構成し、「道具的思考」を展開し、働きかけた世界の意味を構成していく「問題解決的思考」でなければならない。
- ・人は環境に働きかけるという「探求」のプロセスを経ることにより、自分自身とまわりとの関係を構成するだけでなく、その意味を作り上げ、さらに環境の中に存在する人たちとの間に共同的关系をも作り上げる。この過程そのものが学習である。

2. 構成主義の視点

- ・真理とは脱状況的なものではなく、歴史や文化状況に依存しているもの
- ・知識は、それがおかれている状況との関係性の中で意味をもってくる。
- ・知識はコミュニティの人たちの社会的相互作用の過程の中で構成していくもの
- ・知識は、状況や歴史に依存し、相対的なもの

(動的・相対的な存在としての知識。ここでいう知識は、断片的知識ではなく、構造化された知識、解釈的知識であろう)

○ショー

教師の「実践的知識」とは限られた文脈に依存した一種の経験的知識。生徒の学習活動における不確実な状況に探りを入れながら未知の問題の解決に向かう知識でもある。

○レイヴとウェンガー

学習とは、個人が社会集団へ参加していくプロセスそのものである

「正統的周辺参加」

学習者はそのコミュニティの構造的制約のもとに他の成員と協同していく中で、成員としてのアイデンティティをつくりあげていく。

学校教育における「学びの共同体」：参加したくなる共同体の形成がポイントになるだろう

○構成主義の学びのモデルのキーワード

「意味づけ」「価値観」「関係性」「一体感」

3. 構成主義の学習環境デザイン

学習者が自立的に学ぶことができ、一緒にいる仲間や教師と意味のあるやり取りができることを促す学習環境を用意する

①学習活動をより大きな枠組みの中に埋め込む

- ・何のために学ぶのかということを学習者が認識すると主体的な取り組みが期待できる。

②問題や課題に主体的に取り組めるように支援する

- ・現実の問題状況を埋め込む ← 切実感・必要感

③本物の問題状況をデザインする

- ・科学者の新しい法則を見つけ出したときの感動を学ぶこと。プロセスの追体験

④現実の複雑な社会状況を反映した学習環境と課題をデザインする

- ・現実の複雑な社会状況を課題として取り組むことで、多様なアプローチがあることを学ぶ（それが許される連携相手（地域人材・機関）が必要）

⑤プロセスを自分事化

- ・解決方法を指示しない

⑥多様なコミュニケーション・モード

- ・生徒の思考に対して疑問を投げかけたり、別な見方を提示する

⑦多様な視点での評価

- ・様々な背景をもった人たちが互いに議論したり、意見をぶつけ合うことのできる環境を用意

⑧内省の機会を用意する

- ・内省を通してメタ認知を育てる
- ・仲間同士で話し合える環境を提供する（相互評価）



研究仲間がひとり増えました。平城小学校の新宮先生です。